

最後の思い出



中学生になり、二か月が過ぎた頃だった。その日も、公園で親友の潤子と遊ぶ約束をしていた。「じゃーん。スマホ、買ってもらっちゃった。これで潤子といつでも連絡が取れるね！」公園に着くなり、私は買ったばかりのスマートフォンを潤子に見せた。「やったー。さっそく、連絡先を交換しよう！」

SNSは便利だ。感じたことをすぐに伝えられる。写真や動画だって共有できる。でも、使い方には気を付けなければいけない。いつまでも使っていたり、相手の顔が見えないからこそ言葉には注意しなければいけなかったり。だから私も、潤子と「大切なことは直接会って言葉で伝える」というルールを決めて使うことにした。初夏の真っ赤な夕日を共に浴びながら、額の汗が光る中で約束だった。

「大切な話があるからSNSではなく、直接話がしたいの。」

十月のある日、私は潤子からいつもの公園に呼び出された。

「再来週には、引越しをするんだ。一か月くらい前に親から言われてたんだけど、なかなか言い出せなくて。ごめん、真奈……。」

「えっ……。冗談、だよな？」

親友からの突然の告白に、私は耳を疑った。

「冗談、だったらいいんだけど……。」

今にも涙がこぼれ落ちそうな潤子の目が、ことの真実を語っていた。

私と潤子は、小さな頃からの親友だった。家が近所だということもあり、何をするにも一緒だった。スマートフォンアルバムには、二人の思い出の写真がいくつもある。そんな大切な存在の潤子とお別れをしなければならぬ。私は言葉が出なかった。頭の中は真っ白だった。あと二週間……。



そのあとのことは、どんなやりとりをしたのか、全く覚えていない。沈んだ気持ちで家に帰り、ベッドに倒れこんだ。そして、泣き続けた。

いつの間にか寝てしまっていたようで、スマートフォンのお知らせで目が覚めた。潤子からのメッセージだ。

「今日はおめんね。突然でびっくりしたよね。残り少ない日々だけど、よろしくね。」

「うん。すごくびっくりした……。でも、くよくよしてられないよね。あと二週間、よろしくね！」

あと二週間。親友である私が落ち込んでいる場合ではない。潤子のメッセージを読みながら、私は潤子との思い出作りのため、自分に何ができるか考え始めた。



次の日。晴れやかな秋空の朝、私は颯爽と学校へ駆けて行くと、早速思いを行動に移した。潤子が喜んでくれるお別れ会を開く。これが今の私にできる最高の思い出作りだ。すでに登校していた智実と結花にもこの話を伝えた。私と潤子と智実と結花。私たちはSNSでもグループでやりとりをしている仲よし。二人も、潤子からのメッセージで引越しのことを聞いていたようだ。それで、潤子にしてあげられることはないか相談しよう、早く登校してきていたらいい。さすがは智実と結花だ。二人とも、私の提案に賛成してくれた。そうと決まればと、さっそく準備に取り掛かった。

「ここをこうすると、もっと喜んでくれるんじゃない？」

三人でお別れ会について話し合っていると、潤子が登校してきた。

「みんな、おはよう。昨日は突然おめんね。」

「うん。あと少しだけど、またよろしくね。」

その日は、いつも以上に潤子と共に過ごした。残り二週間という限られた時間から考えると、もちろん喜ばしいことであった。しかしその反面、三人で相談できる貴重な時間が減ってしまうのは惜しい……。そんなことを考えていた帰り際、智実が言った。

「じゃあ、SNSでグループをつくらうよ。そっちの方がスムーズに進められるんじゃない？」

「そうだね。賛成！」

私たち三人は、サプライズのためのグループをつくってやりとりを始めた。なかよし四人で最後に最高の思い出を作るため、私はやる気に満ち溢れていた。

それから毎日、私たちは準備を進めた。二週間という短い期間で、最高の会が開けるように。

もちろん、潤子に悟られないよう、SNSでの連絡を中心としていた。私も智実も結花も、「潤子を喜ばせたい」その一心でやりとりをしていた。しかし、そんな私たちの様子について、潤子がSNSでメッセージを送ってきた。

「真奈、最近、智実と結花がそっけない気がするの。もうすぐお別れだから、休み時間ももっと話したいんだけどさ。SNSもそう。あんなに毎日盛り上がった四人のグループも、ここ数日はさっぱりだし。あと数日なのに、なんか、みんなとすれ違いばかりになっている気がするってどうか……。ちょっとさみしくって。」

「そんなことないんじゃない？きつと、『別れる』ってことを考えすぎて、それがみんなとの距離に感じちゃってるんだよ。グループのことだって、きつと話題がないだけだと思うよ。」

ハラハラしながら返信をした。何とか取り繕つくろえただろうか。

「うーん、そうなのかな。」

腑ぶに落ちないような返答ではあったが、いつも通り趣味の話題で盛り上がったので、きつと大丈夫であろう。念のため、二人にメッセージを送った。

「智実、結花、お別れ会の準備ありがとう。潤子が喜ぶ姿を想像すると、すごく楽しみだね。ただ、潤子はみんなと今の時間を大切にしたいと思ってるんじゃないかな。休み時間も、もっと潤子と一緒に過ごそうよ？」

二人からの返信は早かった。

「準備も進めたいけど、潤子のための会だもんね。」

智実は分かってくれたようだ。しかし、結花は違った。

「何よ、それ。時間がないんだから、仕方ないじゃない。そもそも、真奈が言い出したことでしょ。限られた時間で準備をしているんだからさ。だれのためにやってると思ってるの！」

その日は、それ以上結花からのメッセージが来ることはなかった。

次の日、私は学校に着くなり結花に謝った。



「昨日はごめん、がんばってくれてる結花に不快な思いをさせちゃって。」

「ううん。私の方こそごめん。真奈のメッセージを違う意味でとらえて、ついカツとなっちゃって。」

私たちがもめている場合ではないと、私たちは仲直りをして準備を続けた。もちろん、潤子との時間を大切にしようということも忘れずに。でも……。潤子と話す二人の様子は、確かに何だかぎこちない気がする。潤子に目をやると、浮かぬ表情をしている。どうすれば……。潤子に合わせる顔がなく、一人で帰った。

家に着き、もやもやした気持ちでぼーっとしていると、「だれのためにやってると思ってるの!」という結花の言葉が、私の頭によみがえってきた。そんなとき、スマートフォンが鳴った。潤子からのメッセージだ。

「真奈。大切な話があるんだ……。いつもの公園に来られる?」

「うん。私も、話したいことがある。」

気分はどんよりとしていた。空模様も、心の中が表れたかのような曇天^{どんてん}。私は走って向かった。額に、じつとりと汗をかくほどに。

雨粒がこぼれ始めたころ、私は公園に着いた。潤子はすでに来ていた。

「潤子。智実、結花のことなんだけど……。」

私の言葉を遮る^{さへぎ}ように、潤子が話し始めた。

「真奈、ごめん……。家族の都合で、私たちの引越^{ひこぎ}し早まっちゃった……。今週いっぱい、こっちを離れるんだ。荷物の整理とかしなくちゃで、あと一日しか学校にも行けないから、みんなにきちんと話すことができなくなっちゃって。だから、せめて真奈だけにはと思って。」

「……。えっ?」

雨粒が私の目をかすめた。さっきまでよりも、雨が強まっている。

「もっと、みんなと話したかった。もっと、もっと……。」

私の頭の奥には、降り続ける雨の音に混じる潤子の言葉にならない声が、いつまでも響き続けていた。

